

異文化は教えられるか

—ことば・文化・アイデンティティ

台湾日本語文学会

2008年12月20日(日) 淡江大学

細川英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科

1. 言語活動の循環構造プロセス

- 情報→感じる(感覚・感情)
 - →考える(思考)
 - →話す・書く(表現する)
 - →他者→聞く・読む(理解する) →感じる(感覚・感情) →考える(思考) →話す・書く(表現する)

 - 循環プロセスの活性化とその自覚化
-

2.対話の重要性

- テーマ性のあるやり取り(対話)の重要性
 - テーマを自分にひきつける(テーマと自分との関係を語ること)
 - 個人の言語活動は、テーマのある対話によって活性化する。
-

3. 言いたいことは100%伝わらない

- 言いたいことは100%伝わらない(「円滑なコミュニケーション」観の欺瞞)
 - 他者からの反応によって自分の言いたいことが理解できた(ような気がする)。
 - テーマは、本来的に自己の中にあるのではなく、他者との対話の関係の中から生まれる。
-

4. 「文化」をどう捉えるか

- 専門分野解説 Large C (見える文化)
 - 物質文化(文学・芸能・建築…)・日本(人)論
 - 社会慣習・生活習慣 small c (見えにくい・見えない文化)
 - 行動文化(日本人の行動様式)／精神文化(日本人の思考方法)
 - 社会の外側から観察・分析の対象として文化を捉える。
-

5. イメージとしての文化

- 文化を社会慣習および個人習慣の複合イメージとして捉える。
 - 「文化」イメージは、コミュニケーション行為の中で個人化される。
 - 個人の認識の表われとして、個人と個人の関係性を形成する。
-

6.「文化」イメージはどこにある？

- 「情報」と「体験」によるイメージの形成
 - 「情報」と「体験」をどのようにして乗り越えるか
 - 自分の中のイメージの更新へ
 - 多文化主義multi-cultureから、複文化主義plurie-cultureへ
 - inter-culture(相互文化)inter-culturel(相互文化性)
-

7.「言いたいことが言えない」というジレンマ

- 「言いたいこと」は自分の中にあるのか？
 - 他者との関係性としてのことばを自分のことばとする—「待つ自分」／「受ける自分」の意味
 - 即時的な方法論を求めない
 - 10人10色の方法、理想的なモデルは存在しない
-

8. 言語活動環境設計論へ

- 学習／教育における個人の能力伸長の目的化の意味
 - アイデンティティとは何かー居場所とは環境
 - 能力伸長から、社会をつくる他者との関係構築へ
 - 個人から社会へ、社会から個人へ、という循環環境設計をめざす。
-

異文化は教えられるか

—ことば・文化・アイデンティティ

ありがとうございました。

細川英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科